

福祉の 未来を 考える。

福祉は大きな転換点をいま、
迎えようとしています。
「支える・支えられる」関係から、
社会全体でお互いを支え合い、
能動的にアプローチして、
そこに参加し、各人が深く考えて役割を
担い合う時代が変わってきています。
そのようななかで、介護福祉士の活躍の場はどこにあるのでしょうか？
福祉の国家資格である「三福祉士」の一員でもある介護福祉士。
三福祉士の他のメンバーでもある社会福祉士・精神保健福祉士とともに、
多様化を続ける少子高齢社会を見つめ、専門職としてのあり方について考えてみました。



少子高齢化・多様化社会で期待される「三福祉士」とは？

福祉の世界の国家資格は「三福祉士」と呼ばれ、社会福祉士・介護福祉士・精神保健福祉士3つの種類があります。
これらの職業がいま、注目を浴びているのは、少子高齢化に向かい、「福祉」の考え方がとても重要になっているからです。
そしてこの流れにコミットしている専門職だからです。
日常生活を継続することが難しくなっている人に対して、どうしたら自立した生活が送れ、人としての幸せを再び
取り戻してもらえるのか。専門的な知識・技術をもとにしたサポートとアドバイスを行ってくれる頼りになる存在です。



私たち介護福祉士は、高齢者や障がいのある方が
毎日安心して過ごせるように、
「ふつうの暮らし」をサポートします

Part 1

時代が変わり 多様化する介護と それを支える介護福祉士 の仕事がいま、熱い

堀田 社会福祉士・介護福祉士の資格制度が始まって30年、精神保健福祉士の資格ができてから20年が経ちます。それぞれの歴史を振り返り、この間の社会の変化をどう見ていらっしゃるのか、まずは石本さんにお聞きします。

石本 僕が仕事を始めた30年前と異なり、最近では、介護現場で求められるニーズやご家族からのご要望など、時代とともに変化しています。認知症のケアや、権利擁護的な側面など要素が増え、**介護は非常に多様化しています。**

西島 昭和62年に社会福祉士・介護

福祉士法が成立し、平成に入って、社会福祉士・ソーシャルワーカーという国家資格が誕生。平成18年に、地域包括支援センターが誕生して、保健師と社会福祉士の2職種に新たに主任介護支援専門員が加わり、3職種で地域の相談に応えていこうという流れになりました。措置から契約の時代になり、成年後見制度が誕生して、福祉は特別なことではなく身近になりました。

柏木 精神保健福祉士という資格は、施行から20年ですが、私どもの協会自体は、発足してから50数年と長い歴史があります。長い期間、精神科の病院に入院されている方の社会復帰をサポートし、地域で暮らしていただくための相談援助を行ってきました。さらに雇用不安、非正規労働の問題、ブラック企業など、社会は新たな不安を呼び起こし、うつ病や

依存症など多くの精神的疾患を生み出しています。そういったメンタルヘルスに課題をもつ人たちに対しても支援できる私たちの役割が見直されつつあります

堀田 石本さんは介護福祉士として、高齢者の暮らしや環境の変化をどう見ていらっしゃるでしょうか？

石本 最近ではスマートフォンやタブレットを、ご利用者がデイに持ち込んで、お孫さんの写真をお互い見せ合うようになっています。**利用者の方の生活も様変わりをしています。また複合的なニーズを世帯の中で抱えていらっしゃるご家庭が、ものすごく増えてきています。**認知症のお母さんがいらっしゃる家庭のキーパーソンが精神疾患を持っている息子さんであるとか、そのご兄弟がさらに知的障がいをおもちになっているとか。介護の切り口だけで介入しても

福祉の 未来を 考える。

三福祉士鼎談 介護福祉士 × 社会福祉士 × 精神保健福祉士

解決できないことがずいぶん出てきています。そのような状況下、「福祉」の部分でしっかりとアプローチできる介護福祉士ならではのスキルの修得が求められています。

堀田 高齢者の暮らしや価値観、家族の形もずいぶん多様になってきているなかで、さまざまな課題を抱えた方々のまるごとの相談では社会福祉士の役割がますます要になってきていますね。

西島 はい。地域からすると心配な部分が多々あり、そこに私たち社会福祉士が間に入ってお話を聞き、相手の実情なども伝えながら、架け橋となって双方をつなぐ役割を担えたら、と思います。まさに福祉職の出番というか、頑張りどころではないでしょうか。

堀田 精神的な疾患をもつ方々の数も増えてきています。

柏木 はい。精神科、メンタルヘルスという言葉がかなり一般化しています。うつ病などもポピュラーな病気となっていますので、精神科に対

する敷居は以前に比べ、低くなっています。

Part 2

介護福祉士は高齢者の暮らしを支える専門職 ヤル気スイッチをON にできる

堀田 時代の変遷につれ、ケアするご家族がいらっしゃらない、あるいはケアを担うご家族にも困難を抱える方が増えてきています。そんななかで、一人ひとりにとってのふつうの暮らしの幸せを支える介護のあり方が改めて問われています。

石本 熊本地震を経験して、ふつうの暮らしの幸せというものを、我がごととして実感しました。今まで気兼ねなく水も使い、電気も使い、風呂に入りご飯を食べ、家族とリビングで過ごし、ふつうに暮らしていた。それが一瞬にして奪われたんです。その不自由さを体験したなかで、**あらためて介護を必要とされている**

方々の日常が、暮らしづらい状態にあることに気づきました。テレビのリモコンが使いづらい、扉を開けにくいなど、日常生活のなかで不自由さを感じている。そこに我々が関わることで、当たり前にならざるを得ようになる。派手さはないかもしれないけど、そうした**日々のささやかな幸せの積み重ねに関わっていくなかで、暮らしていくことに対する意欲が上がり、自立支援が進んでいく。**僕らが介入して引っ張るのではなくて、**いかにその人のヤル気スイッチを入れるのか。**

我々介護福祉士は、日常生活の暮らしを支える専門職です。日々の積み重ねの先にその人らしい大きな目標、目的を見据えていくことがとても重要です。

堀田 ふつうの暮らしの幸せって失われてみて気づく。人としての尊厳や権利も、阻害されてみて初めてわかる。災害等の危機や変化がないと、日常のなかでなかなか実感しにくい。それぞれにとっての当たり前を大切



介護の仕事の幅広い魅力を発信し
さまざまな職種の人たちとチームを組んで
ケアをマネジメントするのが介護福祉士の役割

にすることです。

西島 「その方に寄り添う」……実際にお話を精一杯聞かせていただいて、不自由さを自分なりに咀嚼し理解したうえで、何が必要なのかを一方的ではなく、確認しながら一緒に考えていくというようなプロセスがすごく大事です。人間って自分をわかってもらえて、気にしてくれる人がいると安心できる。支援につながる。その入り口のところが特に難しいのかもしれない。そのためにソーシャルワークの技能はもちろんのこと、気持ちの部分においても、しっかりと向き合っていきたいです。

堀田 ちょっとしたつまずきや病気、時に勤務先が倒産した…等いろいろなきっかけで、私たちは居場所や人との関係を失っていきます。社会的に孤立してしまった方々が、つながりを回復して立ち上がっていかれるには、何が手が必要になるでしょう？

柏木 私たち三福祉士にとっていちばん難しいのは、医療への受診ある

いは援助を拒否する人。その人たちをどう支援していくのかが、私たちのこれからの課題だと思います。支援を拒否していくプロセス、そういう状況に陥っていくまでのプロセスが必ずあったはず。そういう人たちをソーシャルワーカーが発見して、早くに対応することが大事です。私たちはやはり福祉職ですから、いちばんの基本として、他の人の苦しみや痛みを自分の痛みのように感じる。それがたぶん共感でしょう。そのことなくして福祉職というのは存在し得ない。丁寧に時間をかけて、その人たちの思いに寄り添って行くということが出発点となります。まずは、私たちが信頼できる専門職であるということが第一です。

堀田 共感の力に触れてくださいました。もともと、隣の人、その痛みや苦しみに心を寄せるのは、すべての人が持つ心のありようではないかと思っています。だれもがもつこのケアする心が発揮される環境を整えるのも専門職の役割の一つですね。この

あたりで、今までの支援を振り返って、いちばん印象に残る風景をお聞かせいただけますか？

石本 共感という点では、我々自身が老いを経験していないことがあって、本当の意味で高齢者の気持ちとか、老いに伴っていろんな身体の不自由さが出てくるということなど、実感しづらいということがあります。こうなんだろうな、あんななんだろうなと想いを馳せ、学習や教育の過程で、疑似体験的に身に着けながら、向き合っていくことに尽きると思います。僕も50歳手前になり、自分の家族が認知症になって初めて、家族ならではの心理の部分、葛藤を味わいました。それ以降、実際のご利用者に向き合うときに、そのご家族の気持ちを以前よりもっと理解したいと思うようになりました。

西島 自分が体験したものについては、共感できる。私も、親の介護が必要になったとき、家族の大変さとか気持ちを実感できるようになりました。また、認知症の方の支援に入っ



福祉の 未来を 考える。

三福祉士鼎談 介護福祉士 × 社会福祉士 × 精神保健福祉士

て、当事者の話を聞かせていただき、疑似体験をすることで、不安なのはきっとこういう理由があるんだろうなと……感じるようになりました。

堀田 支援を受けることを拒否する方やご家庭も少なからずあるなかで、時に共感が押しつけのよう感じられている側面もあるかと思うのですが……もともととはどうしても外からの支援を受けたくないと考えていた方が、地域に、そして地域の側も融けていったというような、そんな体験があればご紹介いただけますか。

柏木 私は、精神科の病院に勤務しているので、決していいことではありませんが、強制介入ということが法的には可能です。つい最近の事例ですが、危機的状況が迫っていて、ご本人を説得したりするのが難しかったので、精神科に強制入院となりま

した。その方は、精神科医や我々に心を開くということではなくて、何も語ってくれないんです。いちばん最初に心を開いたのは、入浴のときの看護師さんのケアでした。そのときだけ、彼は自分の気持ちを吐露したんです。

コミュニケーションが難しくても通じるんだ、そこにケアの本質があるんだなと、すごさを感じた貴重な経験です。病院のスタッフだけでなく地域包括支援センターとか、後見人になられた弁護士さんが、本人の意思がどこにあるんだろう、という暮らしが望ましいのだろうと、何度もケースカンファレンスをして考えました。今は本人の意思で施設に入られています。

石本 シンプルに気持ちいい、心地よい、といった心のひだみみたいな部

分にしっかりとアプローチができる場面が、おそらくあったんでしょうね。入浴という、直接本人に触れるケアで、あまり緊張しない雰囲気ができあがった。そこでの語りかける言葉であったり、**リラックスできる温かな状況が、心を開いてくださる道すじになったんじゃない**でしょうか。介護の仕事でも、こういう体験ができる貴重な瞬間があります。**そこが介護の仕事の醍醐味**です。

Part 3

地域のなかで支え合い 福祉の質をもっと 高めていきたい

堀田 地域包括ケアシステムの構築から地域共生社会の実現へ、国際的には「誰一人取り残さない」を理念





とするSDGsが掲げられるなか、改めてすべての人特に専門職だけではなく、すべての人が持っている力をもっと開花させる、あるいは一緒に今ないものをつくっていく状況が望まれています。そういう側面では、今どんな取り組みが始まっているのでしょうか？

石本 少子化における人手不足があるなかで、介護においては、プロが本来やるべきことを大事にし、プロじゃない方の力をもっと活用しましょうという点が大きく打ち出されています。さらに間口を広げて、**多様な人材を介護の担い手として地域の中で育てる**、ということも施策として明確にされています。さらに**外国人の方の参入**が進められており、**ダイバーシティ**というキーワードも出てきています。

私たち三福祉士の目ざす国民福祉の向上という大きい目標のもとでは、**地域の皆さんの福祉の質がどう上がっていくかが重要**です。

堀田 介護サービスを利用しながら

も働きたい、社会に貢献したいと願う方々が、地域活動に参加する、仕事に取組む場としても機能する介護事業所も出てきていますね。必要な支援を受けながらも参加しつづける支援を考えたときに、介護現場で出てきている芽はどんなものがありますか？

石本 まさに**共生社会**というのは、**支える側と支えられる側に分かれるのではなくて、時にお互いが支え、それが入れ替わるということが前提**となっています。さらには**高齢者の就労**というキーワードも近年出てきています。そうすると利用者でありながらも、その人が社会の中で果たし得る役割をちゃんとつくり、社会参加を促す、ということがもっとみんなの感覚のなかにできてくると思います。

介護を必要とする人も、年配の高齢者だけとは限らず、若い方でも40代ぐらいから利用者として来られる場合もあります。**旧態依然とした介護のありようでは、その方の自立性**

を高めるとか、意欲を引き出すようなことはなかなか難しいでしょう。やはり役割をもつとか、そういった視点がすごく大事です。

堀田 立場を越えて、同じ地域に暮らす生活者として、望む地域の風景を共につくっていくというプロセスのなかで、ソーシャルワークの役割についてお話しください。

西島 地域のなかでは孤独死があったりして、私たち社会福祉士が関わったり、地域の方たちも関わったりしますが、時に、自分たちの地域だから自分たちでなんとかしたい、と話され、自分が安心して暮らせる地域であってほしいと思う方が出てきています。いつでも私たちソーシャルワーカーに相談してもらえれば、一緒に考えたいと思っています。ソーシャルワークのちょっとした知識とか視点とかあると、関わり方がすごく変わります。

堀田 暮らしにくさが見えにくく、また社会的な偏見を持たれやすい方々の支援に携わることが多い精神



福祉の 未来を 考える。

三福祉士鼎談 介護福祉士 × 社会福祉士 × 精神保健福祉士

保健福祉士の方々にとっても、地域のなかで、「共に」というところが、チャレンジの一つではないかと思いますがいかがでしょうか。

柏木 今、私は堺の自立支援協議会で、防災のことを考える機会を持っていますが、平常時から自分たちがもっと地域に向かって開かれなくていけない、と当事者の方がおっしゃるんです。地域の人に障がい者のことをわかってもらうためには、自らを可視化させないと、いざとなったときには誰も助けてはくれない、と。本当にそのとおりで、平常時に地域の人たちと交わるためには、差別されるんじゃないかという不安を自分たちから克服していかなければならない。そのときに、専門職である私たちは、どんな状況になっても必ず後ろから支えて行く存在であらねばならないと考えています。

最近では、地域に子ども食堂や、認知症の忘れカフェといったような、拠点の輪ができています。素晴らしい考え方だと思うのですが、

年齢やら障がい別にしないで、生活拠点の場を地域につくり、そこに専門職の相談機能を入れて、問題を早くからキャッチします。何らかの大きな問題を抱えている人であれば、そこでキャッチできる。それが専門職としての力であると考えます。

堀田 この10年ほどを振り返ると、認知症のある方を含めて、「私たち抜きに私たちのことを決めないで」の機運が高まってきています。当事者の声により社会を変える、当事者を含めて社会変革に取り組むということに対して、専門職はどのような後方支援ができるのでしょうか。

西島 当事者の方々が理解してほしいとあえて自分から語ってくださるのは、地域みんなのためにもなるし、自分たちも暮らしやすくなる。こういう取り組みってすごく大事な関わりだと思います。私たち専門職もそこでエンパワメントされることが多いですね。

Part 4

多様な社会ニーズを察知し、 介護チームの リーダー的存在として 活躍したい

堀田 最後に今後の展望について、お話しください。

石本 介護福祉士は、いま全国に162万人ぐらいいて、三福祉士のなかでいちばん多いですね。時代のニーズや変化に対して、我々もそれを敏感に察知して変わっていかなければなりません。人材の養成のしかたなども、今までと変える必要があります。社会的評価を上げるために**介護の幅広い魅力や力というものを発信**しなければならない。現場で**さまざまな職種の人たちとチームを構成し、サービスをマネジメント**していく。その中で介護福祉士は、介護職チームの中核的な役割をしっかりと担い、先端技術を駆使しながら、高齢者や障がい者の方を支えていく。**多様化するニーズに応えるためのさ**



まざまな知識・技術をよりいっそう高めなければいけませんし、マネジメントスキルを高め、地域の中で活躍できる人材としてより成長していくことが求められています。次の10年後は、そういった点を踏まえ、多種多様な面で応えられる専門職として成長していくことが重要です。

堀田 ソーシャルワークにも、いまとても期待が高まっています。

西島 やっぱり専門職としての実践がまず問われると思います。実践を通して、地域や個人などさまざまな課題の解決に向け実践を、しっかり発信し、見える化していく。そのことでより多くの社会福祉士が、地域に、社会に応える。まさに今、専門職である社会福祉士が、地域のなかでソーシャルワーク機能を発揮することが期待されています。そこにしっかり応える第一歩を踏み出して

いきたいと思います。

柏木 私たちは、精神保健福祉士という仕事の社会的認知度をもっと高めることが重要です。ソーシャルワーカーやソーシャルワークに届かない、アクセスできないで潜在化している人たちに、私たちのような存在が、あなたの身近にいるのよということアピールしないと、私たちの存在価値はありません。そういう人たちのためにこそ、私たちは存在しているのです。社会的な問題は今後、さらに複雑化していくでしょう。地域自体が弱体化しているので、こういった社会自体を変革していくのが私たちの役割。社会から落ちこぼれていたり、落伍していくとご自身で思っているような人たちが何とか私たちアクセスできるように、道すじをつくっていききたいと思います。

介護は人々の日常生活を支え、人生に寄り添い 幸せをサポートするクリエイティブな仕事です

公益社団法人日本介護福祉士会会長 石本 淳也

介護福祉士という資格をもった仲間たちが、今現在、全国に160万人を超えて存在しています。

少子高齢社会を迎える我が国では、地域社会の中で介護を必要とする方々がこれからもっと増えていくでしょう。国民の皆様の日常生活を支える、そして人生に寄り添う、といった大変魅力ある仕事である介護福祉士。これから先の時代に向けて、私たちの果たすべき役割に大きな期待が寄せられています。

このリーフレットを通じて、介護福祉士という仕事、その魅力に共感していただき、これからの日本を一緒に支えていただければうれしく思います。



コーディネーター
堀田 聰子

慶應義塾大学大学院
健康マネジメント研究科教授

京都大学法学部卒業後、東京大学社会科学研究所特任准教授、ユトレヒト大学訪問教授等を経て現職（医学部・ウェルビーイングリサーチセンター兼任、認知症未来共創ハブ代表）。博士（国際公共政策）。



石本 淳也

公益社団法人
日本介護福祉士会会長

介護福祉士・介護支援専門員・社会福祉士
1971年熊本県生まれ。1992年熊本市内の特別養護老人ホームに入職。2004年同市老人保健施設居宅介護支援管理者・相談支援室長・通所リハビリセンター長を経る。2015年 Office Ishimoto 介護福祉社会福祉事務所代表。2008年熊本県介護福祉士会会長（現職）。2014年日本介護福祉士会副会長、2016年同会会長に史上最年少で就任。



西島 善久

公益社団法人
日本社会福祉士会会長

1984年3月 佛敎大学社会学部社会福祉学科卒業。2016年3月 社会福祉法人玉美福祉会理事長、現在に至る。
2017年6月より日本社会福祉士会会長に就任。



柏木 一恵

公益社団法人
日本精神保健福祉士協会会長

同志社大学文学部社会学科卒業。1976年より財団法人（現：公益財団法人）浅香山病院に入職し現在に至る。
2012年4月より社団法人（現：公益社団法人）日本精神保健福祉士協会会長に就任。

公益社団法人 日本介護福祉士会
The Japan Association Certificated Care Workers

〒112-0004 東京都文京区後楽1丁目1番13号
TEL:03-5615-9295
FAX:03-5618-9296
e-mail:webmaster@jaccw.or.jp

この鼎談は、公益財団法人社会福祉振興・試験センターの助成により実施しました。